



なごや「聖歌」だより 10月号'09

「爾」なんじは目下？

ある外部の会合で、『爾』というのは目下に対して使うことばなのに、どうして正教会は神さまに対して『爾』と呼ぶのですか」という質問を受けたことがあります。現代人の私たちには『爾』はとてもあらたまった表現に聞こえますが、漢文脈では同等以下の相手に使うのだそうです。

考えてみると、ロシアでも Ты、すなわち二人称単数、親しい相手に対して用いるくだけた用語が使われています。

ハリストスは、天の神・父を「アツバ(おとうちゃん)」と、親しく呼びかけました。ハリストスの救いによって神は畏ろしいだけの超自然的な存在ではなく、慈しみと憐れみ深い父親のような身近な存在になりました。

聖歌の中で、神に向かって『爾』と呼びかけるとき、また、生神女や聖人たちに向かって呼びかけるとき、そこに信頼しきった家族のような親しみがこめられています。『なんじ』と歌うときあらためて、親しみをこめて歌い

お願い

名古屋教会にはさまざまな国籍のメンバーが参拝しています。『信経』は一つの信仰を表明し、ハリストスの下にある一つの教会であることを確認する信仰告白です。そのため、各国語で信経、天主経、領聖祝文を併記したプラスチックのカードを作り、手に持って一緒にお祈りしています。どなたでもかまいません。『信経』の前の連禱のあたりで、気がついた方が外国人参拝者にも配布してください。

また同様に、子供たちを中心に読んできた『領聖詞』の句(148聖詠)も参拝者が交替で1句ずつ読んでいます。スラブ語、英語、日本語を並記したカードを回しますので、隣の方に回してください。自分の国のことばで「領聖詞」が読まれると、嬉しそうなほえみがこぼれます。



「新聖堂」にむけて。

♪名古屋：10月11日(日)
代式後の基礎練習。

来年早々の成聖式に向けて、「晩禱」、「成聖式」、「主教聖体礼儀」の練習を始めています。

9月は代式祈禱後の練習日に、基礎練習に加え、「トンデスポティン」を練習しました。成聖式そのものの歌や「イスポラ」の練習も始めます。

♪半田：10月7日(水) 11:45ごろから
次の回のトロパリやポロキメンを中心に練習します。名古屋での聖歌に参加される方も多いので、単音の練習後4声聖歌も練習します。

10月の指揮当番

4日 マリア松島 18日 エレナ広石
25日 ピーメン松島

聖歌練習

ズナメニイ研究会 紹介

ズナメニイ研究会では、リガで発行されたズナメニイの教科書を利用して、1調の特徴を学んでいます。今回はメロディ定型であるポペフキを調べました。ポペフキにもそれぞれ意味が含まれ、優しさ、暗さ、などといった雰囲気的なものだけでなく、音楽そのものの断言、宣言などテキストの内容や礼拝の構造を表します。

たとえば1調のドリンカというポペフキはポロキメン、アリュイヤ、「主は神なり」などの最後に用いられ、「宣言」を表します。



次回第6回

10月24日 土曜日 10時～

3. 歌い方のスタイル (前号からの続き)

どういふスタイルで実施するかは、かなり古い時代から厳密に規定されていました。しかし礼拝音楽の変化にともない形の変ったものも多くあります。式順上位置が移動したものもあるし、別のタイプの歌に取って替わられたものもあり、礼拝の形が進化する過程で、元来の特徴を失ったものもあります。

たとえばビザンティンの教会では、もともとアギアソフィア大聖堂の式順に範をとった礼拝の形「歌課(choral office) (ἀσματική ἀκολουθία / песенное последование)」が広く行われていましたが、次第に廃れ、すべての教会が修道院の規定に従って礼拝を行うようになりました。修道院の規定は、大きく分けてコンスタンティノーブル

のストディオス修道院のティピコン(奉事規定、礼拝上の規定を含んだ修道院生活のきまり)とエルサレムの聖サワ修道院がありますが、ロシアでは最初はストディオス修道院のティピコンを用いていましたが、後に聖サワのものを導入し、今日に至るまでロシアの修道院、大聖堂、教区教会では聖サワの奉事規定に従っています。

新しい歌やスタイルが導入され古いものが消滅したり、礼拝の形が発展していく中で聖歌を組み合わせる新しい方法が作られたり、あるいは礼拝音楽そのものが変化して、歌詞や音楽、調(エコス・グラス)の形式が変わったものもあります。とはいえ、実施のスタイルにおける原則は変わっていません。

次回から、4聖歌の名称、トロパリ、スティヒラなどの聖歌の主な名称を解説します。

Johan von Gardner, *Russian Church Singing*, SVS

教会史と聖歌の発展

歌 課 ἀσματική ἀκολουθία / песенное последование

歴史上の大事件や国家の変化は聖歌発展に大きな影響を与えました。たとえば上記の「歌課」はコンスタンティノーブルやエルサレムの聖サワ大聖堂で発展した絢爛豪華な儀式です。10世紀、ロシア使節に「天にあるか地にあるのかわからなかった」と言わしめた儀式は、この「歌課」でした。

「歌課」の要素は今も残っています。たとえばアンティフォンは皇帝も会衆も参加した大行列から生まれました。主宰の祭日の第1アンティフォンの「救世主や〜」という繰り返しは当時の名残です。またコンダクはソロ歌手が技巧を凝らして歌ったものです。聖ロマンを始め、正教会の聖歌者は作詞、作曲、演奏の一人三役、今で言うシンガーソングライターでした。大祭日には、特別の服を着て、大聖堂の中央の高い壇上で、祭日のテーマを絵物語のように歌いあげました。

それに対して修道院ではシンプルな祈りが指向され、もともと歌は含まれず、聖詠だけを唱えていました。イスラムの侵入やイコノクラスムなどによって、修道士たちが移動を余儀なくされるうちに街の教会の聖歌が修道院にも次第に取り込まれ修道院が聖歌創作の中心になりました。クリトの聖アンドレイ、ダマスクの聖イオアンも修道士です。

ビザンティンの国力が衰退してくると、大聖堂で大がかりな儀式を行うことが難しくなり、次第に修道院のシンプルな儀式、特にストディオス修道院のやり方に倣うようになりました。

ロシアでも13世紀頃までは町の教会では「歌課」、修道院ではストディオスの規則、ふたつが平行して行われていました。

二つのティピコン(奉事規定・礼拝のきまり)

ティピコンは奉事規定を含む修道院の生活全体を規定する修道規則です。修道院のティピコンには大きく分けて二つの伝統があり、ひとつがコンスタンティノーブルのストディオス修道院、もうひとつがエルサレム郊外の聖サワ修道院です。今でもギリシアではストディオスのものが使われ、ロシアやアトスでは聖サワが用いられています。

二つは大部分共通ですが、徹夜禱、聖体礼儀のアンティフォンの行い方などに違いがあります。日本を含むロシア系教会では聖サワのティピコンに従い、土曜日にも徹夜禱を行い、日曜日の聖体礼儀では「我が霊や」で始まる102、145聖詠と真福詞を歌います。ギリシア系教会では土曜日には徹夜禱を行わず、アンティフォンも主宰の祭日同様「救世主や〜」のリフレインと聖詠の句が歌われます。

もともとビザンティンではストディオスが優勢でしたが、13世紀頃ヘシカスム運動が盛んだったアトスで、より厳しい齋規定、徹夜の祈りを含む聖サワの規則が取り入れられました。1353年にアトスの大修道院長であったフィロセオスがコンスタンティノーブル総主教になり、聖サワのティピコンをもとにして規則本『ディアタクシス』として出版し、ギリシア地域に導入しようとしたが、実際にはあまり浸透せず、ギリシアでは今もストディオスの規則が主流です。

ロシアではヘシカスム運動に近かったキエフ府主教キプリアンによって聖サワティピコンが導入され、ニーコンの改革によって推し進められました。そのときベースになったのが、1545年ベネチアで再版された『ディアタクシス』でした。

参考資料:

P.Meyendorff, lecture tape, "The development of Byzantine Office"

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 Liturgia

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料